

The 13th IAGG Master Class on Ageing in Asia に参加して

小原 僚一

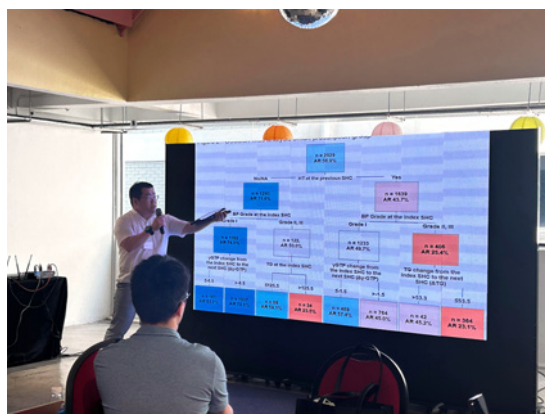
(日老医誌 2025 ; 62 : 334)

私は大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学で研究をしている大学院生です。基礎研究や臨床研究に触れる機会をいただき、今回臨床研究結果を英語で発表すべく、2025年5月23日から25日にかけてマレーシアのクアラルンプールで開催されたIAGGマスタークラスへ参加させていただきました。日本、韓国、中国、台湾、インドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピンなど多数の国々からの研究発表に触れることができました。

マスタークラスはウェルカムパーティーで和やかな雰囲気でも始めました。内容として1日目は教授の講演を聞いた他、事前に告知されたグループに分かれての高齢者症例の検討会を行いました。2日目は講演会と自分の研究内容をe-posterにまとめ、各グループ内で発表しました。優秀な研究発表は3日目に発表することとなり、私は恐悦至極ながら選ばれたため、その後は泣きながら準備していました(泣)。3日目は最後の講演を聞いたのちに、各グループにおける症例検討会の結果を発表するほか、ポスター発表を皆の前で行いました。

お恥ずかしい限りですがグループの皆様は優しくサポートしてくださいましたが、うまく自分の意見を言えず、本当に強い不満と恥ずかしさを感じました。しかし、研究発表は研究内容の面白さこそが大切ということを知りました。これは過言かもしれませんが、日本人の多くが英語を喋れないにもかかわらず、面白い研究が多数でています。この研究の素地となる研究姿勢、制度などを連綿と続いてきた研究文化が私を救ってくれたように感じました。

また各症例検討会を通じて、高齢者支援の資源が各国で少し異なるが同じ問題点に直面するということができた。自立して生活できない高齢者はとても多く、実臨床でも本当に頭を抱える場面です。そのような場面で使用できる資源は限られますが、海外では教会



が対応するなど文化の違いを感じるすることができました。

緊張に次ぐ緊張を感じ、負担は強く感じました。しかしそれ以上に様々なことに気が付かされたとても良い勉強会でありました。老年医学研究の重要性と、これまでの研究文化を残せるように自分自身も精進しなければならないと強く感じました。このような機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げたいと思います。